

5C16 回目キングダム 20260411

賛美:18:00.30

祈り:

主よ、感謝です。ここに我々は今、息を吸って主を思って、

主よ、あなたの御霊の中で豊かに、今ここにいます。

それぞれが、それぞれの場に、主がそこにおられます。

主よ、我々はあなたを愛し、あなたを慕い、主よ、あなたを祝福しています。

あなたの臨在が、あなたの存在が、我々を喜びに満たし、平安に満たし、

そして、もっと我々が成長したいという渴望を満たしておられます。

我々はそれを喜びます。ここに今、互いに声を掛け合い、今向き合っておられる我々を喜びます。

今この時を主よ。我々は切り開きます。昨日や先週や先月の、もう私たちではない。

今日また新たな新鮮な一日を、押し開きます。

主よ、今からの時を喜んで迎えたいと思います。

主の御国の中で、私たちはこれから始めます。アーメン。

前半:19:49.74

さあ、4月のキングダムセミナーです。本で言うとパート4に入ってきましたけど、この第5クール目は、もう本の通りになかなかいいっていません。あっちに入り、こっちに入り、あっちを突っ込み、こっちを詳しくやりという感じで進めています。

ですから、これまで何回も聞いてこられた方は、それなりに。で、第5クールから聞き始めた方は、本当に濃厚だと思われるかもしれません。けれども、いつから食べ始めても、我々の今日の御言葉の霊の食事です。一緒に食べて成長していきましょう。21:17.40

それでは、初めます。3月の時に、私たちは『初めのアダム』に注目しようと言いました。で、今日もちょっと濃厚になりますので、しっかり、ガッツリ取り組みましょう。21:48.26

それですね、『初めのアダム』を造られて、神様が造った後に、『治めさせよう』という決意を1章の26節で、語っておられるわけです。26節[神に言われた。『われわれにかたどり、われわれに似せて人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。』]と。この神様の決意というのを、しっかり、受け止めるべきですね。で、新約聖書でも『治める』『支配する』という言葉がいくつも語られています。23:11.22

そして、ここからまた、さらに深みを持って、『我々の関係性』というのを、もっと自分のものにしていきたいんです。で、『私たちと神との関係性』というのが、ここにまず書かれてある。それで今日は、『私たちと神様との関係性』をしっかりと出発点にして、予告しましたように、『サタン・悪霊と私たちの関係性』はどうよ、というそっちもちょっと深めていきたいと思います。

5C16 回目キングダム 20260411

神様は私たちに対して、それはもう受け止める通りなんですけど、皆さん、サタンっていうのは、神様とどんな関係？ **サタンは神様の許す範囲で、動いていると思いますか？** その辺突っ込んだこと、ありますか？

ヨブ記というのがありますよね。ヨブ記というのは読んだこと、ありますでしょうか？ 読みました？ 読みましたね。はい。みんな読みましたけど、その笑顔は何ですか？

ヨブ記というのは、どうよ。あんまり話題にすることがない。神様の前にサタンがやってきて、ヨブのことを、ああだ、こうだと言う。サタンも神様の許しが出たから、ヨブにやってんじゃないの？ という・・・そこから、私たちが苦難に遭う。私たちが病気になる。私たちが試練に遭う。なんでこんなことが自分に起こるんだという時に、それは神様がサタンにそうさせているんだと・・・そういう風に受け止めようかなという感じですか？ あるいは、マタイ 10:29-31 に、[・・・雀の一羽でも、あなたがたの父の許しなしには地に落ちることはありません。また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています] と。これってものすごく安心ですか？ 27・58.14

それとか、パウロは、私は傲慢にならないように、肉体のとげが与えられた。それは私が高ぶらないようにさせるためのサタンの使いなんだと。これ、どういう風に受け止める？

私たちは、自分が今どんな位置にいて、どんな立場にいて、何をしようとしているのか、どっちに向かっているのかということところを、そこを見てみると、そんなに激しい試練に今は、ないかもしれない。ヨブのようなあんな過酷な目に遭ってないかもしれない。でも、そういうことがやってきたら、そしたら、**私たちは自分の信仰をどう使うんだ？** という大切な問題なんです。

試練の大小じゃなくてね、我々の周りに起こっている出来事、その中で、**私たちはどんな関係性を持って、どんな関係性の中に置かれているんだということなんですよ。** そこをちょっと、今日はヨブ記も含めて、見ていきたいと思います。今日のうちにあの長いヨブ記が全部できるかという、それは無理なんですけど、要点を押えながら後で見ていきたいと思います。29:45.91

はい、それではまず、この前回のおさらいにもなりますけど、創世紀の一章を見てください。もう一度、さらに突っ込んで言うべきところは言いたいと思います。だんだん、深いところを聞く耳になってきたでしょう。皆さん。「初めから、いっぱい言われてもねえ〜。」というところがあると思います。だんだん聞く耳に慣れてきましたか？

私の手元に、さっき外でサクッとコピーしてきたものがあります。これを配りますね。ラインの皆さんは、すみません。ヘブライ語の対訳聖書の創世記をお持ちの方は、20 ページを開いてください。対訳聖書をお持ちでない方は今、写真に撮ってグループ LINE に送りますね。初めから手配してなくてすみません。ゆき届きましたか？ 皆さん。私のコピーでは、ここですよと分かってもらえるように、四角で囲んでおきました。1章26節の前半と27節を囲んでおきました。31:42.12

5C16 回目キングダム 20260411

1章 26節、日本語訳では、『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう』となっていますが、原文を順番に訳すと、【そして言った。神は『わたしたちは造ろう。人を。わたしたちの像に。わたしたちの似姿に。そして彼らは治める』・・・日本語に訳すと、いろいろ書き方、言い方の工夫をしてしまいますからね。でも原文の文字を拾っていくと単純です。【そして言った。エロヒームは】となります。

前回言いました通り、『わたしたちが造ろう。』←《私たち》と神様が言っているんです。この《私たち》って誰？というところじゃないですか。【われわれは造ろう。われわれにかたどり】と訳してあるこの『わたしたちは造ろう』と言った。文字通り複数なんですよ。33:04.38

だからね、古代から、「この『私たち』って誰のことよ」という、人類の大きな宿題、課題として擦った揉んだと、言われてきたんです。この議論を知っている方は多いと思います。下の欄外 26 のところに、『私たち』というのとは何かという紹介をしていますよね。ここをちょっと見て下さい。

一人称複数形なので、諸説がある。**a** 神が天使に呼びかけた。**b** 大地に呼びかけた **c** 神の尊厳を表す複数形。神が自分に呼びかけた。**d** 神と人との共同作業。このように 4 つ 5 つの解釈があるんです。あなたはどう思いますか？こう思わなくっちゃいけませんよと言うんじゃないんですよ。これも、もう太古の昔から、「俺はこう思う。」「私はこっちだ。どうしてもこう思う」とか、いろいろ言われているんです。この問題だけで 1 時間話し合っても面白いかもしれないね。こんなことを日本語文で、聖書を読んだときに、こういうことを考えましたか？

そして、それだけじゃあなくて、後にキリスト教ができた時に、人々はもう一つ、説を付け加えたんです。「これは三位一体の私たちなんだ」と言って、イエス様を付け加えたんです。父と御霊と、イエス様がいたわけよね。「なるほど、だから、『われわれ』なんだ」と。これ、どう思いますか？

ただもう一つ、食い下がるところがあって、1章の1節は、神が創造した『造った』という言葉は、この『ナアセ』じゃなくて、『バーラー』なんです。『バーラー』というヘブライ語が使われていて、その『バーラー』というのは、主語が神様でないと使わない動詞『バーラー』なんです。ところがここにある『ナアセ』という言葉の語源は、『アーサー』と言うんですけど、これは神様が主語で「神が造った」と使えるし、人間が主語で「人が造った」とも使える『造る（アーサー）』を使っているんです。

神様は、この聖書の中で、語りかけの中で、『バーラー』というのと『アーサー』というのと、二つ混ぜて使っているんです。「なんで？」と思いますよね。そこなんです。「全部神様が造るんだから、『バーラー』でいいじゃない。」というところなんですけど、神様は敢えて、重要なところで『アーサー』という、人が主語でも使える『造る』を使っているわけです。じゃあ、やっぱり天使か？天使と一緒に造るんだ。天使は神の補助として、手伝いとして活躍するから、・・・でも天使と一緒に造るというそれが他にあるか？とか、・・・まあ、ここはいろいろなことが言えます。

ただもう一つ、イエス様が来る前か、そして来た後からも、じんわりと言われているのは、神は「人を造ろう」

5C16 回目キングダム 20260411

「アダムを造ろう」と言った時に、[天地が造られる前から、あなたは覚えられている]とエペソ人の手紙 1:4 にあるように、神様の内側に、思いに、アダムという存在を造ろうとした時に、もうすでに神様の内側にアダムという存在がもうできていたんだと。

ということは、神様が一方的に造るということに加えて、『人を造る創造』はその造られる人の意志、願い、協力がなければ人は造ることが、できないのだ」という思想を見るわけです。これは旧約聖書・新約聖書全部まとめてね。41:03.23

だから、私達、あなたという存在は、ここに在る、確かにいるんです。それは、あなたという存在が、神と共に、「私は造ろう」、「造られよう」という意志がなければ、あなたという人は完成しないんですよ。」という思想が、読みが、語りかけがあって、それを受け止めていく人は多い。

だから、単に理科的にこれを読んで、「あ、神様はこうこう、こうやって、神様に似せて造ったんだね。そうやってできたんだね。」と言えそうなんだけど、私達の心はそれでは済まない。

私ね、今小学生になる孫がいるんですけどね。女の子なんですけど、ちょこちょこっと寄ってきて「ジイジ、神様っているの？」って聞くんですよ。まあ、ポツポツ大人の話を耳にするもんだからでしょうけれども、聞いてくるわけ。私は「いるよ。ちゃんといるよ。目に見えないけどね。」と。「じゃあ、なんで神様がいるってわかるんだと思う？」って聞いたら、キョトーンとしたから、それはね、「みいちゃんがいるからだよ」「みいちゃんの体があって、心がここにあるやろ。考え事してるやろ。嬉しい時、ドキドキする時あるやろ。ここにみいちゃんがいるからだよ。だから、神様もいるんだよ」って言うんです。そしたらキョトーンとしてる。「何言っているのかわからん」というような顔で。でも、それでいいんですよ。その言葉が心に残れば。いつか必ず悟る時があると思っている。自分がいるから。・・・ああ、そうか。そんなに自分と近くにいるんだということ。

だから、この『わたしたちは造ろう』という時、造る前からもう神様は、あなたという存在を見て、覚えていて、そして、もうガッツリ腕を組んで、「一緒に造ろう」と言って、存在しているのは私達なんです。どこに自分の虚しさがあるのか、どこに自分が心定まらないふわふわした距離感があるのか、そんな隙間もないように我々は造られているんですよ。45:09.30

そしてその次、いきますよ。

【『わたしたちは造ろう。人、アダムを。』】その次。[わたしたちの像に]と言ってますね。この『像』って、『神様の像』って何よ。ねえ、皆さん、後に律法、十戒の中に、「あなたがたは、神の像を造ってはならない」と神様が言ってるんですよ。『像を造ってはならない』という神様が、神の像にあなたを造っているんですよ。これって、いいの？神様が十戒を違反して、これで良いの？46:21.12

つまり、神様は「わたしたちの像に」というその『わたしたち』という神様はもう絶対の『最初のお方』でしょ。ベレシートという初めの言葉はそういう意味だったんですよ。最初の最初。神様以外に何も主権者はいない。神様が絶対。神様が最初のお方。という神様の支配。絶対者。唯一者。その『神様の絶対的な姿の像に、人を造っ

5C16 回目キングダム 20260411

たんだ』ということ。これ、すごいことです。大変なことなんですよ。だから、あなたは『神様の像』なんです。
考えたことある？あなたが『神様の像』なんです。あなたが『神様の姿』なんです。すごいことを言ってるんですよ。考えたことありますか？48:10.20

で、その次。『わたしたちの 似姿に』と言っています。なんで？像だけでいいんじゃないですか？

だけど、この『像』と『似姿』という、この 2つの言葉には、ちょっと奥深いニュアンスがあるんです。
さっき『像』というのが絶対的な、もう誰も揺がすことのできない像、頑とした姿を言っているのに対して、この『キドゥムテヌ』、『似姿』というのは、『ディムート』と言うんですけど、何を表しているかということ、神様の絶対的な姿から今度、周りに溢れ出る、染み出ていくというか、全身から神の性質が迸(ほとばし)り、出ていくというか・・・愛とか聖さとか、正しさとか、満ち足りた喜びとか、要するにそれが神の性質なんです。その神様の性質が『似姿』それを持たせられている。それがあなたに与えられているというか・・・。49:56.34

だから、ベツアルメヌ(像)1 個だけだったら、それはもう頑として、もう絶対的な、厳しく大きな存在だけなんだけど、それだけじゃないんです。その像の内側の性質が、相手に、周りに、表現されていく、そういうものなんだよと。そういうニュアンス、面持ちがあるんです。50:39.48

だから、文学的に『像に』、『似姿に』という、単にテンポ良く書いているんだという感じではなくて、ここには、そういう『わたしたちは造ろう』と言われたのと同じように、深い語りかけがあるわけなんです。
ヴァヨメルエロヒム、ナアセアダム、ヴェツエルメヌ、キドゥムテヌ。ここで、一息ついて、『それを造ったよ。分かったかと。受け止めてくれよ』と、語っている。

そして、ヴェイルドゥー。ここで、ちょっと置くの。そして、『彼らは治めるんだ』と言っているわけ。
何を治めるかと言ったら、その下の『海の魚、空の鳥。家畜。そして、すべての地を這うもの、すべてのものを治めるんだよ』と、言っているわけ。・・・「なんだ、こういう家畜や動物だけなんだね」って、そんな風に取りたくないでくださいね。ここにも深い広範囲な意味があるんです。52:42.23

次に、27 節を見てください。[そして創造した。神は、人を造った]←神様が実際に創造されたんです。26 節は、言っただけなんですよ。26 節は神様の決心。神様の心で、27 節になって神様は実際に創造した。ということになっています。ここにはパーラーが使われている。ヴァイヴラーというのが、パーラーのこと。その下の段にもパーラーってあるでしょ。[神は創造した。]・・・神様しか主語で使われない。しっかりと、神が創造した。神様が責任を持って創造したんだということです。でも、その心は『ナアセ』なんだということです。53:58.26

さらにその続き、27 節を見てください。この 27 節には、[神はアダムを創造した]と。その次、『自分の像に』そして、『神の像に』と書いてあるんでしょう。これって、『像』だけだよ。ここに 似姿を入れていません。ここに似姿を入れていない。何故か？『似姿』というのは、その像の中であって、その人が、他の相手と生きる時に必要なものであり、また、出るものだから。

5C16 回目キングダム 20260411

だから『男と女を創造した』というこの中に、神様の似姿は私達に現れ出ていく。そのように、人の共同体が生み出されていくんです。

そしてこの後に、**産めよ、増えよ、地に満ちよ**が出てくるわけです。『人』とは書いていませんけれど。ここは、『男と女に』と書いてあるけど、別に夫婦の間だけとかって、そういうもんじゃないよ。人と人の向き合いの中に、神の像は、その輝きは、性質は、現れてくるんだよと。 56:01.26

参加者:質問ではないんですけど、『似姿』というのは、男と女のその関係性の中に、神の性質が溢れ出てくるという意味で言っていると捉えて良いですか？

先生:はい、神の関係性が現れて出てくると言うことです。5>:29.22

これ、ここまで読み込んで理解して、味わっていくという方法を今やっています。でもこんなことを全然考えないで、もう、スラスラーと読んで、「はい、はい」というふうに読んでいく人も沢山います。だから、これをあなたはどちらにしますか？ということなんです。56:58.08

だから『初めのアダム』というのは、このように神様の決心を味わい、そして 2 章に行けば、命の息をその鼻から入れられた。そんなことをされた被造物の動物はありませんから。命の息を入れられたということは・・・**人とは、いったい何者なのでしょう**と、旧約の人物が呟いているけれど、本当、そうですよ。これが、『あなたです』よ。『私です』よと、受け止めた時に、どうですか？

でも、人間には、いろんないらぬものがついているよね。ということになっていくんですけど、この人間に對しての**神様の創造の思い、そこには、共に生きるパートナーシップがある。その『思い』**なんですけど、ここに、神と人との重要な存在があるんですけど、じゃあ、サタンってなんなのよ。 58:50.40

創世紀の 1 章には書いていません。でも、聖書の中のあっちこっちに、チラチラ出てくる。そのサタンの配下に、もう無数の悪霊がいるわけでしょ。それぞれの地方や国を治める悪霊。どこそこの君と言われるようなやつが。その下にいっぱい無数の悪霊がいる。その悪霊は、どっから来たんですか？どうなったんですか？というところを調べたことはありますか？そんなにね、聖書はそのことに多くを語ってはいません。でも、その成り立ち、基本的な知識というのは、あちこち、チラホラあるんです。

で、一番よく聞かれるところ、どこかわかりますか？

イザヤ書の 14 章に記述があります。14 章の 12 節**暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。**13 節**あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々の遙か上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。』**14 節**蜜雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』**15 節**しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。**11:02:01.08

・・・この箇所は、イザヤ書の初めからずっとバビロンの王について言われている中で、14 章に来て語られた言

5C16 回目キングダム 20260411

葉です。

けれども、この書かれている内容が、『天に登ろう。北の果てにある会合の山にすわろう』・・・この『北の果てにある会合』という表現は、神々の集い。神々の会議というところを古くから指す言葉で、『密雲の頂』というのは、『神々の臨在、存在の一番てっぺんに』ということ。そのような志を持って言った。『しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる』これが、いつのことだったのかというのは、はっきり書いていません。

天地創造、創世紀1章の前なのか、あるいはその最中なのか、あるいは3章で神様が蛇を睨んだ。なんということをしたんだというあの時に、これがあったんだという学者もいるから、どうなんでしょうか。いろいろ諸説あります。1:04:05.58

でも、その内実はどうであつただろうと。ヨハネの黙示録の間でも、もっとリアルに出てきますよね。で、それが、ヤコブの手紙なんかでも。新約のヤコブの手紙の4章の7節。【ですから、神に従いなさい。そして悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。】こういうふうに、詰まるところ、この使徒たちの手紙の後の方に行けば、究極的にここだということを書いてるんですよ。1:05:30.90

ヤコブの次のペテロの第一の手紙の5章の8節。【身を慎み、目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子のように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。】9節【堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがたの兄弟である人々は同じ苦しみを通して来たのです。】1:06:05.04

・・・ね。だから、さっきのイザヤ書の12章のいと高き方のようになろうと狙っているものが、いたんだとしたら、今読んだ創世紀の1章の26節の神様の決心を、そのものは知っているはずなんですよ。そしたら、人間が完全なるライバルでしょ。

そのものは神の決心を知っていて、人間にそんな権威が与えられ、輝きが与えられるんだとしたら、たまったもんじゃない。そしたら、神のようにになりたい者にとっては、どうしたらいいんですか？何がターゲットになるんですか？人ですよ。あいつを自分の支配下にできたんだとしたら、絶対自分は勝利するんだと。ですよ。1:07:38.82

だから創世記の3章の出来事は、起こったんですよ。だから、神様は人間にその権威を与え、支配権を与え、輝きを与え、もうぞっこん任せ、委ねた。ところが、サタンというのは、今度その人間に目をつけた。そして近寄ってきた。蛇を使って。そして・・・もう周知のように蛇はエヴァに語りかけ、そして善悪の木の実を食べさせた。「食べたら神のようになるよ」と言ってね。

この善悪の木の実を食べたという、『食べた』ということだけが、問題だというのではない。ということは、ずっと前から話してますよね。なぜ善悪を知る木の実なんだ？ということ。そして、もう一方は命の木の実なんです。このこともずっと前から話していますが、今日は、もうそこを詳しく言うのはやめておきますね。1:09:45.96

とにかく、サタンは、自分の腕の中にエバを引き込んでしまった。それで、神様は、その状態のままエデンの園にずっと居させるわけにはいかないので、だから、外に出した。

5C16 回目キングダム 20260411

なぜならば、そのままの状態でも命の木の実を食べさせていたら、サタンも神の命の実を食べることになるから。だから外に出して、ケルビムと炎の剣で、エデン園に帰ってこれないように。そうやって守ったんです。1:11:05.58

そしたらどうですか？この世界も、神が造った被造物も人も、サタンの配下として抑えられてしまったから、神様はどうするんですか？神様は自分が任せ、委ねた権威を、人間に持たせたんだけど、その任せられた人間が、サタンに渡してしまったんだから、神様はどうしたらいいんですか？「サタンよ。ちょっとこい」と、お前なんてことをしたんだ」「この馬鹿野郎」と言って、ボコッとやって、はい、「早く返せ、返せ」って言えるのか。

それは、できません。なぜならば、全部任せた権威ある人間が、アダムが、自分の決心で、サタンにそれを渡してしまったんだから。神様が横から手を出して、「お前、何するんだ。それ、お前のんじゃないだろう」というわけにはいきません。

いいですか？この神様の筋というか、自分の像を委ねたものに対する神様の立ち姿ということをしっかり覚えておかないといけません。1:12:49.97

さて、ヨブの話になるけど、このヨブ記というのは、いつ頃の話だと思いますか？このヨブ記の中には、律法のことは、一切出てきません。読んだ人、わかると思いますけど。いっさいモーセの律法のことが出てきません。だから、それよりももっと前。そしてヨブのこの年齢、最後にチラッと出てくるその年齢からして、ノアの箱舟の前後ではないかと言われています。だけど、その頃、一体どうだったのか。神様はまだ律法というものを自分の選んだ民として与えていないんです。

その状態の中でヨブ記を読んでいると、このヨブ記の1章にわたしの息子たちが、あるいは罪を犯し、心の中で神を呪ったかもしれないと思ったから、全焼の生贄をヨブは、捧げているわけです。これはわかるよね。カインとアベルも捧げ物を持ってきたし、ノアも箱舟を出た後も、祭壇を造っているし、まあ、そんな並びがここにもある。1:15:09.87

1章6節ある日、神の子らが主の前に来て立ったとき、サタンも来てその中にいた。】

・・・これ、へえ？と思いませんか。思ったでしょう。ここを読んだ時。これ、どんな場面？『神の子ら』というのは、この旧約の特にこの時代の言葉では、人間のことでなくて、『天使たちのこと』だと見られているんです。

だから、そこに天使たちが集まってきた。その中にサタンも来て、その中にいたんです。神様のそんな会話にサタンが来ていいのかい?! お前、駄目、駄目。出ていきなさいって言わないの?・・・でもいたんだよね。こういうラフさ？どうですか？神様はいつもサタンを嫌って睨みつけていた。あるいはサタンは神様を怖がって、いつも影に隠れて逃げ回っていたというイメージを持っていませんか？

でも、神様はしっかりした権威の神であり、主権者であって、神様はその主権者の造られた全てのものとのありのままの関係性に、平然としておられますよ。1:17:13.08

5C16 回目キングダム 20260411

7 節[主はサタンに仰せられた。『お前はどこから来たのか。』サタンは主に応えて言った。「地を歩き巡り、そこを歩き回ってきました。』]8 節[主はサタンに仰せられた。『おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者はひとりも地上にはいないのだが。』]これに対して、サタンは議論をふっかける。9～11 節[「サタンは主に答えて言った。ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。あなたは彼とその家とすべての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。あなたが彼の手のわざを祝福されたので、彼の家畜は地に増え広がっています。しかし、あなたの手を伸べ、彼のすべての持ち物を打ってください。彼はきっとあなたに向かってのろうに違いありません」]・・・ヨブはあなたから祝福され恵みをいただいているのではないか。そうしたならば、あなたに感謝していい人間になるではありませんかと。もしそれをやめたらどうですか？彼はあなたに向かってこれまでの態度を取りませんよ、きっと。ということでしょう。

つまり、[ノアはこの時代の中にあっても、まず、神に心を留め、神に向き合おうとした人である]と。そんな人が他にもいたよね。そう、エノク。ノア。神と共に歩んだ。ヨブも。悪から遠ざかり潔白で正しく神を恐れていた。でもヨブのこの神への向き合いには足りないところがあったんです。というのが最後まで読んだらわかったんだよね。まあ、それは後に置いて。

ちょっと休憩する前にここだけ言いましょう。12 節[主はサタンに仰せられた。『では、彼のすべての持ち物をお前の手に任せよう。ただ、彼の身に手を伸ばしてはならない。』そこでサタンは主の前から出て行った。]

・・・ここが、キーワードっていうか、重要なところになってきています。

あのね、啓示文書というか、黙示文書の特徴として、これまでいろいろ話した時に言いましたように、皆さんね、聖書の言葉には、幅があるんです。はい、それを原文で探ることができる人は、どうぞ探ってください。「え？ここちょっと」と思うんだったら、そこは立ち止まって、みるべきです。したことありますか？

皆さん、ここ 12 節。主はサタンに仰せられた。次のカッコの神様の言葉です。『では、彼のすべての持ち物をお前の手に任せよう。』この文です。

これね、この初めに、こういう言葉が入っているんです。ヘブライ語で言うと『ヒンネー』って言うんです。聞いたことある人いますか？『はい、あります。』『ヒンネー』という言葉がわざわざ入ってるんです。この『ヒンネー』というのは、強調であり、確認であり、念押しに使う時、注意喚起に使う、そういう言葉なんです。

じゃあ、なんで彼のすべての持ち物をあなたに任せるといってこれを強調しているんですか？いえいえ。原文はもっとシビアですよ。つまり直訳に近い言葉で言うとな、『見よ。確かに、彼のすべての持ち物はあなたの手の中にある。』と断定しているんです。

それをなんで『あなたの手に任せよう』になっちゃうんですか？この『任せよう』というのは、完全に意識です。そのような文脈であるという流れで、ここを受け取っている訳者が、読む人が、もうそう心の中に読み込んでしまっている。

5C16 回目キングダム 20260411

『任せよう』なんていう、未来形未完形で言っていないから。『すでに、あなたの手の中にある』と言うニュアンスが強い。『すでに』という言葉はありませんが、そのような言い方として、取れます。英語の聖書を見ることが出来る方がいますか？英語の聖書を読まれている方は、いろんな英語の訳文をめぐって読んでみてください。

ここはやっぱり原文の通りに『あなたの手の中にある』とか、あなたの『パワーの中にある』とか。そういう訳になっている訳が沢山あります。『手に任せよう』なんていうニュアンスの英語の聖書もありますよ。ありますけど、英語訳の聖書って日本語訳よりもずっと多いですから。それをザーっと調べてみたら、『もう、あなたのパワーのもとにあるんだよ。』と言っているところが多いのです。1:25:30.35

そうすると、この神とサタンの会話はどうなんですか？サタンは、神様にこういう風に、ヨブの試練にもたらしすことを吹っかけたけど、神様は『ダメだ、ダメだ。ヨブは、私の像と私の似姿そのままなんだから。』と言わない。『もうすでにお前の手の中にあるんだから、お前がしたかったらするしかない』と。ただ、神様はヨブの身に手を伸ばしてはならない。』と、むしろ、ヨブをかばっているわけです。そういうサタンとの関係性だけど、『ヨブの体には手を出すな』と言ってヨブをかばっているわけ。

そうすると、ヨブ記全体の読み方が、変わってきます。そして、深くなっていきます。そして、後の長い長いヨブ記の中で、ヨブ記を通して神様は、私達に何を語ろうとしているかということを、こっから紐解いていくきっかけになります。

どう思いますか？ヨブ記を読んだ皆さん。試練も病気も困難も、全部神様が許して許可しているから、やってくるんだ。サタン、悪霊が、そう考えて良いのですか？どっちですか？

そしたら我々は今、女の末としてのイエス・キリストが来て、全てのわざを、信仰を完成させた後、今は私たちが神の中に、相互内在の中にいる私たちの、その行動はどうなんですか？と、いうところです。

はい、後半この続きに入っていきます。はいじゃあ、休憩を取ります。

後半:

はい、それでは後半に入きましょう。

ヨブ記 1:12[・・・彼のすべての持ち物は、お前の手の中にある・・・]と、このことがあって、それでサタンが、そのようにするわけですね。

で、2章になって1節[ある日のこと、神の子らが主の前に来て立った時、サタンもいっしょに来て、主の前に立った。]・・・同じことが繰り返される。2節[・・・『お前はどこから来たのか。』サタンは主に答えて言った。『地を歩き回り、そこを歩き回ってきました。』]3節[主はサタンに仰せられた。『おまえはわたしのしもべヨブに心を留めたか。・・・』]この語りの中で、また繰り返される。4～5節[サタンは主に答えて言った。皮の代わり

5C16 回目キングダム 20260411

には皮を持っています。人は自分の命の代わりには、すべての持ち物を与えるものです。しかし、今あなたの手を伸べ、彼の骨と肉とを打ってください。彼はきっと、あなたをのろうに違いありません。」そうすると 6 節【主はサタンに仰せられた。『では、彼をお前の手に任せる。・・・』この訳になっているんです。1:55.33

で、ここも同じように『見よ。彼はお前の手の中にある。』が直訳なんです。ただ、『彼の命には触れるな』と神様はヨブのことをかばっている。でも、主権者としての筋から言えば、『彼はお前の手の中にあるんだ』と神様はそれを認めています。

それで、7 節【サタンは主の前から出て行き、ヨブの足の裏から頭の頂きまで悪性の腫物で彼を打った。】・・・こういうヨブ記の始まりからして、もうすでに、サタンは神の許可と許しの中で動くんだ。その子分の悪霊たちも、これがこうなってきたのは、「神様の許可なんだ。神様の許可だから、それでなっているんだから、私はこの試練をどうしようか。」と考える。

このヨブ記の 1 章 2 章の受け取り方というのは、クリスチャンたちの神様との関係性、サタンとの関係性をいつも心の深いところでモヤモヤさせる。それは、「どこなんだろうか」と。

でも、新約聖書で、さっき読んだように、神に従い、サタンに立ち向かえと言ってるから、立ち向かっておこうと思うんだけど、どっか、サタンとの関係性、神様の関係性の中で、すっきりさせないモヤっとするものを残していく。問題のあるところですよ。

5:05.32

そこで、まあご存知のように、ヨブがこんな悲惨な状態になったことに対して、ヨブの友人たちがやってきて、ヨブに意見をするわけですよ。

「真面目なお前がこんなにひどい目に遭うのは、なんかお前に原因があるんだろう。お前は正しい、正しいと言うけれど、でもどっかお前、間違っているところがあるんだよ。」・・・と。なんかごもつともなことを言ってくれるんです。それに対してヨブは、そんなこと言うけど、「私には身に覚えがない」と言って、ああ言えば、こういう。こう言えばああいうで、長い長い議論が続くんです。

この長い長い議論の中で、私たちはそれを見ながら、自分でもモヤモヤとそれを繰り返し考えていく時がある。それを持たされていくわけです。6:37.80

ところがヨブ記の終局になって、神様が語り始めるんだよね。そこからがハイライトになっていきます。

38 章 1～7 節

【主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。

知識もなく言い分を述べて、摂理を暗くするこの者は誰か。

さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。

わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。

あなたは知っているか。だれがその大きさを定め、だれが測りなわをその上に張ったかを。

その台座は何の上にはめ込まれたか。その隅の石はだれが据えたか。

その時、明けの星々が共に喜び歌い、神の子たちはみな喜び叫んだ。】8:14.88

5C16 回目キングダム 20260411

・・・天地創造の初めのことから、神様は確認して語り始めました。

これをずっと読んでいくと、この黙示文学というのが、現代的な私たちからすれば、やたら文章が無駄に長いように見える。くどいように見える。そうじゃありませんか？こんなに、たらたらたらたらと書かなくてもいいでしょう。もうちょっと簡潔に述べたらどうなのよって。でも、今のパ、パッと 5 分 10 分で YouTube がパッと見れて、それも音速を 2 倍にしたりして聞ける今の時代じゃないんですよ。全然ないんですよ。

私たちが、今ヨブ記を読むと、この太古の昔の時代に引き戻されて、語りを聞かされているわけですから。そのつもりで、じっくりと読みながら、この中で言いたい心を受け取るんですよ。で、38 章 39 章と、ずっと神様は、あなたはどうかだろうかと、こうだろうかとやって問いかけ続けているのです。

それから、40 章を見てください。

1-2 節[主はさらに、ヨブに答えて仰せられた。非難する者が全能者と争おうとするのか。神を責める者は、それに答えよ。]・・・つまりね、友人たちとの議論の中でヨブは、もう、しびれをきらしてというか、「私は悪くないと言ってるのに、神様がこうしてるんだ。」ということを主張し続けるわけよ。

ということは、「お前がそうしているのは神様がそうしてるんだ」と。「悪いのは神様か？」と。そういうところまで突き詰められていくわけ。で、そこまで言ってきて、とうとう 40 章になって、神様からこう言われたわけよ。『お前は非難しているが、全能者と争うのか？神を責める者は、神であるわたしを責め立てたいんだったら、じゃあもっと言い立ててみよ』と。で、今度ヨブが答えて言うんです。読んでみますよ。

3 節[主に答えて言った。

ああ、私はつまらない者です。あなたになんと口答えができれば。私はただ手を口に当てるばかりです。一度、私は語りましたが、もう口答えしません。二度と私はくり返しません。]12:26.10

・・・で、ここまで来て、ヨブは悔い改めた。結局は、友達から「お前が悪い、悪い」と言われながら、「でも私は悪くないよ。全部いいことしてきたのに。なのにこんな悪いことが起こると言うんだったら、やっぱりそれは、あっこから来てるんですよ」と言って、神様をチラチラ見る。だけど、神様に直接こう語られたわけよ。

今までは、友達と語りながら、神様を第三者にして語ってきたんじゃないですか。友達と『我と汝』だった。友達と、ギャーギャー言ってきたんです。

今度、突然に神様はその友達にとの間を分け入ってヨブに語りかけてきたんです。38 章なんか、『あらしの中から』と書いてある。神様は、ヨブのところにグッと近づいて、お前は全能者と争おうとするのか。どうなんだよと。

ここまで来て、ヨブは、・・・ここがヨブのいいところですよ。
神と実際に向き合って、もうシャキッと、「私はつまらないものです。なんと口答えできれば。手を口に当て

5C16 回目キングダム 20260411

るばかりです」と。ブツブツと言いわけを言い始めやすいかもわからないけど、このヨブの聖さ、どうですか？
できそうでできないと思いませんか？ 14:48.42

そして、このヨブと神様との応答が始まる。で、これね、あと、40、41、42章まであるんだけど、このヨブと神との応答の中で、6節から14節までが、最もハイライトなんです。一番のクライマックスは、ヨブが元の生活に戻ったというところじゃないかと思うじゃないですか。ところが、最もハイライトはこの40章6節以降からなんです。読んでみるよ。40:6~14

40章 6-14節

【主はあらしの中からヨブに答えて仰せられた。

さあ、あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。わたしはあなたに尋ねる。わたしに示せ。

あなたはわたしのさばきを無効にするつもりか。自分を義とするために、わたしを罪に定めるのか。

あなたには神のような腕があるのか。神のような声で雷鳴をとどろき渡らせるのか。

さあ、誉れ、気高さを身を装い、尊厳と威光を身につけよ。

あなたの激しい怒りを吐き散らし、すべて高ぶるものを見て、これを低くせよ。

すべて高ぶるものを見て、これを押さえ、悪者どもを、その場で踏みじれ。

彼らをともに土のちりの中に隠し、その顔を隠れた所につなぎとめよ。

そうすれば、わたしはあなたをたたえて言おう。あなたの右の手があなたを救えると。 17:21.83

・・・この下り、どう思います？何か感じますか？神様のどんな願い、心を感じますか？

【あなたは勇士のように腰に帯を締めよ。】という下り、あのね、新約聖書で使徒たちがいろいろ述べるよね。その語っている口調というか、例えというか、単語というのは、・・・昔のこのユダヤの人々は、律法に熱心で、多かれ少なかれ、旧約聖書の言葉を覚えているんです。すごい人なんか、モーセ五書なんか空で言える。そんなラビたちがいっぱいいる。一般の人でも、あっちこっちの神の言葉をそらんじて言うわけです。だから新約聖書の使徒たちの言葉の中で、彼らが使っている言葉というのは、旧約聖書で語られていることを、もうパッパッパッと、こう口に出るわけ。そういう習慣があるの。

で、ここで、【あなたは勇士のように腰に帯をしめろ】というところ、何か思いつかない？新訳聖書にあるでしょ。【真理の帯を締め】(エペソ 6:14)って、あるじゃんね。それは、だてに新約のあの時代にポツと思いついて、そう言ってんじゃなくて、あっちこっちの昔から言われてきたそういう事柄を新約聖書の手紙にパッパと書いてあるわけ。だから、【あなたは勇士のように腰に、『真理の帯』を締めよ】・・・真理と書いてないけどね。あなたは
その試練の中で、この嵐の中で、『真理を知れ』と言ってるわけよ。 20:11.94

【わたしはあなたに尋ねる。わたしに示してみろ】・・・あなたは、わたしのしたことを無効にするつもりかと。『自分を正しいとして、わたしを間違いとするのか』と言ってるわけ。

【あなたには神のような腕があるのか。神のような声で雷鳴をとどろき、渡らせるのか。】・・・これ、どう読みますか？皆さん。「あなたは神のような腕があるのか？ないだろうと、神様が言ってるのか？神のような声で雷鳴をとどろき渡られるのか？そんな叫びできないだろう。」と言ってる方を取りますか？神のような腕があな

5C16 回目キングダム 20260411

たにはないのか？と。21:13.98

なぜ私がそんなことを今問うかという、次 **10 節** を見てください。さあ、なんて言ってますか？

【さあ、誉れ、気高さを身に装い、尊厳と威光を身につけよ】・・・これ神様さあ、『誉れ気高さを身に装い、尊厳と威光を身につけよ』って、どういうこと？ 難しい言葉だよね。ヘブライ語で調べることができる人は、ここを調べてください。こういうことがあったらね、「これ神様、いろんな言葉を使っているけどね。この一つ、一つ、ってどんなニュアンスがあるのよ。」「それって、もともとなんていう発音で、どう言ったのよ。」「私、知りたい」と言って、「ちょっと時間とって調べるぞー」と。そうなんです。そんな心持ちあるでしょ。私は、いつもそう。いつもそうなんです。

なぜなら、聖書を開いて、これって？と思ったら、もうだんだんと奥深く入って、楽しくて仕方がない。面白くて仕方がないんです。何々？うん？それで、それでと言って、・・・そうなるんです。何が好物かと言ったら、御言葉の食事ほど美味しいものはないじゃありませんか。

だからね、**『誉れ』**というのは、圧倒的な高さ。圧倒的な卓越性というか、圧倒的な誇り。あのくしゃみするホコリじゃないよ。圧倒的な誇り。誇り高さ。そういうものが表現されている。

『気高さ』というのは、高貴さ。そして、物理的にも、地位的にも、両方に高い。他のものを容易に近づけない気高さを周りに放っている。

【誉れと気高さを身に装え。】他の者が容易に近づけない、高貴さと超越した気高さ。それを自分の装いとせよ。

そして、次。

【尊厳と威光】と書いてある。さっきも言った似たような意味になるけど、この **『尊厳』** というのは、絶対性と超越性すべてのものを凌駕している。

そして、**『威光』** というのは相手に対する輝き。相手に放たれた光、明るさ、闇のない姿、麗しさ、なんですよ。

そうすると皆さん、**《誉れと気高さ》** を対に持ってきている。それから、**《尊厳と威光》** というのを対に持ってきている。これ、ヘブライ語の啓示文書の得意な平行法と言うんですけど、同義的平行法と言って、同じ意義、同じ意味・深みを平行法 を使って、2 回繰り返して、さらに強調するという啓示文学の典型的な手法なんです。

27:14.04

それで、**『誉れ』** というのは、**『神の像』**、**『気高さ』** というのが **『神の似姿』** **『尊厳』** というのが **『神の像』**、**『威光』** というのが **『神の似姿』**。そういうふうに、**『神の像』** と **『神の似姿』** を強調している。

創世記 1:26 **【神の像にかたどり造られ、神の似姿に造られた。】**・・・その初めのアダムのことを彷彿とさせる言葉で、並行法で強調していると読めるんです。27:59.40

だから、あなたは神のような腕があるのか？ないだろうと言ってんじゃなくて、

9 節は、『あなたは神のような腕があるだろう。そのように造つただろう。』『神のような声で響き渡らせることができるかできるだろう。』『誉と気高さ、神の像と神の似姿があるだろう。』と言っているんです。

40 章 11-12 節[あなたの激しい怒りを吐き散らし、すべて高ぶる者を見て、これを低くせよ。]と、命令しているんですよ。『すべて高ぶる者を見て、これを押さえ、悪者どもを、その場で踏みにじれ。』と。

13 節[彼らをともに土のちりの中に隠し、その顔を隠れた所につなぎとめよ。]・・・ちょっと待ってください。私たちは神様の言ったように、『サタンよ、お前の手の中にある』と。「サタンの手の中にあるのに、こんなことができるのでしょうか？」って。できない状態ですよ。できない状態だけど、神様はヨブに嵐の中からこう言ってるんです。

今できる、できないということを通り越して、『わたしは、お前に真理を語るぞ』と。『いいか、腰に真理の帯を締めろ』と。わかる？

だからね、神様がここに現れて、「ほいじゃあ、お前がそうする気持ちがあるんだったら、わたしがサタンをやっつけてやるから」って、・・・そこじゃないんです。そういう土壇場の、あれこれ、やりくり、小細工を言ってるんじゃないんです。30:57.24

神様はこの状態のように、向かい合いたかった。ヨブは、今まで友達とばかり議論して、ああだ、こうだと言って疲れ果てていた。だけど、神様はこのヨブに向かい合いたいんです。『わたしとあなた』として出会いたいんです。ここなんです。ハイライトは。我々は、もうドタバタした事の結末ばかりを気にして読むけれど、いえいえ、神様の心は、そこがハイライトではない。

じゃあ、この 38 章になるまで、神様はなんで黙ってたんですか？こんな長い間。でしょ。ヨブがその友達と喧々諤諤になって、自分の義を主張したいという。そういう。友達との対決、まあいえば、友との対決にヨブはイライラしている。その中で神様は、ヨブに分け入って向き合えない。

そして、40 章 15 節。進みますよ。

[さあ、河馬を見よ。]・・・なんだ？これやって感じ思いませんでしたか？初め読んで。河馬が出てくるのって、面白いよね。『さあ、河馬を見よ。これはあなたと並べて、わたしが造ったもの。牛のように草を食らう』って、・・・ちょっと待ってください。「神様はカバと並べて同じように造ったんですか？違うんじゃないの？河馬と並べないでくださいよ」って言いたいけど、これ続き読んでいくと、その河馬の凄さ、偉大さというのがコンコンと書かれてあるわけ。

誰がこの河馬をあしらうことができるかと。[・・・牛のように草を食らう、見よ、その力は腰にあり、その強さは腹の筋にある。尾は杉の木のように垂れ、ももの筋はからみ合っている。骨は青銅の管、肋骨は鉄の棒のよ

5C16 回目キングダム 20260411

うだ。これは神が造られた第一の獣、これを造られた方が、ご自分の剣でこれに近づく。山々はこれのために産物をもたらし、野の獣もみな、そこで戯れる。彼は。はすの下、あるいは葦の茂みや沼に横たわる。はすはその陰でこれをおおい、川の柳は、これを囲む。たとい川があふれても、それはあわてない。その口にヨルダン川が注ぎ込んでも、動じない。誰がその目をつかんでこれをとらえられようか。だれがわなにかけて、その鼻を突き通すことができようか] 34:53.03

・・・『この河馬を見よ。造られた獣の中で、こんなに強いものがあるか。』**なんでこれを言うか**というと、**6節から 14節までのハイライトの神様の言葉を言ったから**です。河馬でもこんなに強いではないかと。35:23.16

その次、**41章**。今度は何ですか？**1-5節**[あなたは釣針でレビヤタンを釣り上げることができるか。輪縄でその舌を押さえつけることができるか。あなたは葦をその鼻に通すことができるか。これがあなたに、しきりに哀願し、優しいことばで、あなたに語りかけるだろうか。これがあなたと契約を結び、あなたはこれを捕らえて、いつまでも奴隷とすることができようか。あなたは鳥と戯れるようにこれと戯れ、あなたの娘たちのためにこれをつなぐことはできるか]

・・・ずっとこのレビヤタンが続くわけ。なに？って、この順番が読む人を戸惑わせるんだけど、これね、河馬を語って、レビヤタンを語って、**6節から 14節を語って**いれば、まだ見えてくるんだけどね。36:53.94

とくにこのレビヤタンというのは何だと思いませんか？河馬はわかるでしょ。レビヤタンというのは、これは**イザヤ書27章の1節**を見てみてください。イザヤはそういうサタンや深い霊との戦いを克明に挙げる預言者です。27章の1節には、見た人いる？私は開けてないんだけど。ここには、**"逃げ惑う蛇"**って出てくるでしょ。レビヤタンは、つまり大蛇、所謂サタンを想定していると。こういうものが確かにいると。38:20.04

で次、ヨブ**41章33、34節**[地の上には、これと似たものはなく、恐れを知らないものとして造られた。それは全て高いものを見下ろし。それは、すべての誇り高い獣の王でもある]と。

・・・ズバリ、サタンとは言っていないけど、そういうものが諸々いるんだと。これらを今すぐ、お前が押さえつけられるとは言っていないけれど、神の心はそのライン上にあるんだぞと。この獣の誇り高く恐ろしく不動で、屈することがないように見えるこの者たちよりも、お前は、高く卓越性を持ち、圧倒的に強きものとして造られているんだぞと。わかるかと。

これだけの神の語りかけをヨブは、受けただけで、彼は変わったんです。じゃあ今、レビヤタンを何とかできるか、どうのこうのじゃない。そうじゃないんだけど、神の心をまざまざと知って聞かされた時に、ヨブは納得したんです。40:21.30

42章 1～6節[ヨブは、主に答えて言った。あなたには、すべてができること、あなたは、どんな計画も成し遂げることを、私は知りました。知識もなく、摂理を覆い隠す者は、だれか。まことに、私は、自分で悟り得ないことを告げました。自分でも知り得ない不思議を。どうか聞いてください。私は申し上げます。私はあなたにお尋ねします。私にお示しください。私はあなたの噂を耳で聞いていました。しかし、今、この目であなたを見ました。それで私は自分をさげすみ、チリと灰の中で悔い改めます。]

5C16 回目キングダム 20260411

・・・このようにね、**38 章**からここまで、これ以降もずっとそうなんですけど、ヨブと神の"向き合う"『我と汝』が現れていくんです。これがね、ヨブ記の主題なんですよ。41:32.28

で、この後、**7 節**【主がこれらのことばをヨブに語られて後、主はテマン人エリファズに仰せられた。『わたしの怒りはあなたとあなたの二人の友に向かって燃える。それはあなたがたがわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったからだ。』】**8 節**【今、あなたがたは雄牛七頭、雄羊七頭を取って、わたしのしもべヨブのところに行き、あなたがたのために全焼のいけにえをささげよ。わたしのしもべヨブはあなたがたのために祈ろう。わたしは彼を受け入れるので、わたしはあなたがたの恥辱となることはしない。あなたがたはわたしについて真実を語らず、わたしのしもべヨブのようではなかったが】

9 節【テマン人エリファズとシェアハ人ビルダテとナアマ人ツアファルが行って、主の彼らに命じたようにすると、主はヨブの祈りを受け入れられた。】

・・・このヨブの祈りを受け入れられたという言葉に、米印がついてる。**9 節**の欄外。直訳を見てください。祈りを受け入れられたとは書いてない。

『顔を上げられた』と書いてある。顔と顔を、向き合ったんです。

10 節【ヨブがその友人たちのために祈った時、主はヨブの繁栄を元どおりにされた】・・・なんですかこれ?!
つまり、神様とヨブとの向き合うその関係性を今度はヨブはその議論してきた友達との間に持ったと。神との関係性があなたの隣人との関係性に移っていく。光が流れていく。

で、その時に神は、ヨブを元に戻すことができたと言っている。これはサタンの手の中にあるというこの時代の現実の中にあっても、ものすごい福音だったんです。でしょ。

その中にあって、それでも、神と向き合うことの中で神と応答することを重ねていくということで、自分たちは道を切り開いていくことができたんです。44:39.36

でも、今の時代はどうですか？

私たちはサタンの支配下の中に入ってサタンが盗むもの、奪うもの、邪魔するものなんだけど、そういう余計なことをされている現実の中にあるんだけど、神様の心は、第二のアダムをもたらし、私たちができなかった神との向き合うことの完成を、イエス・キリストを通して、してくださったわけ。

信仰の創始者であるイエスに、目をとめ、イエスとの相互内在に、私たちはなったんですよ。そうすると、イエス様の中に私たちはいるわけよ。

第二のアダムの中に。もう第一のアダムじゃない。第二のアダムの中において、初めのアダムの権能に私たちは帰ったんです。戻されたんです。それも一瞬にというよりも、長い時間、月日をかけて。私たちは変えられて、成長させられていくんですよ。そのプロセスの中にあるわけよ。

5C16 回目キングダム 20260411

だから、イエス様の中にいるということは、どうなんですか？サタンは、イエス様のその勝利によって、もう完全に負けました。だからサタンの目から、今イエス様の中にいる私たちを見たら、サタンは私たちがイエス様のように見えるんです。だから何も恐れることはないんです。 46:51.84

時間が迫りましたから言いますが、じゃあ、第Ⅱコリントの 12 章 7 節に、パウロが[・・・肉体に一つのとげを与えられました。・・・私をうつための、サタンの使いです]と書いてある。サタンから来たんだって言っている。あれは、なんですか？「やっぱり、サタンが持ってくるんじゃない」と言うけどね。文字通り、サタンが持ってきた肉体のとげですよ。神様がと、書いてないからね。 47:27.76

それにね、さっき言った『真理の帯を締め』(エペソ 6:14)というのも旧約聖書の中によく出てくる言葉だったと言いましたが、皆さん、その『とげ』という言葉で旧約聖書で探してみるべきです。

例えば、民数記の 33 章の 55 節。それから、モーセ 五書の中でたびたび、神様が警告しているくだりがある。それは、『あなたがたがわたしに従わないならば、・・・』というくだり。例えば、民数記 33:55[もしその地の住民をあなたの方の前から追い払わなければ、あなたがたが残しておく者たちは、あなたがたの目のとげとなり、わき腹のいばらとなり・・・]というこの言い方です。 48:44.40

パウロともあろう人が、モーセ五書を暗証していないわけがない。彼はすんなり口で言えたはず。その彼が私が高ぶっていくそのことに対して、『とげ』というのはね、要するに、病気というよりも、『迫害』です。 他民族からの存在が、他民族との格闘の中で、イスラエルがたびたび捕らえられ、弱めつけられていったという、そのことです。

だからパウロもどうですか？パウロの手紙の後の方を読んだら、彼がどれだけの迫害と苦勞をしているかというのがわかるでしょう。何回もムチで打たれ、何回も拷問にあい、何回も牢獄に捕らえられ、どれだけパウロは。痛めつけられてきたかという。

だからね、今の現代人がパッと見て、パッと読んだら、「肉体のとげ？あ、パウロは目が悪かったらしいよ」とか・・・そうなるんです。でも、読んでいく信憑性からして、パロが肉体のことを言ってるんじゃないくて、あれは『迫害』です。

パウロはそれだけ素晴らしい啓示を受けて、異邦人にそれを語り伝えようとした。それがために、どれだけパウロが異常な人間だと、「あいつを殺してしまえ」というふうに迫害を受け、白い目で見られ、害を加えられたかということなんです。だから、その前後を読んでみたら、その方がスッキリ文面に当たりますよ。ねえ。 51:11.88

それから最後。これもちょっと付け加えておきたいです。初め言いましたことですけど、マタイの 10 章の 29 節。[二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の 一羽でも、あなたがたの父のお許し

5C16 回目キングダム 20260411

なしには、地に落ちることはありません。]30～31 節[また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。だから恐れることはありません。あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です]というこのくだり。

・・・一羽の雀でも神様の許し、許可があって、地に落ちるんだ。というこの言い方。これも調べてみようと思ったことはありませんか？このまま受け取っても、まあ、それはそれで、別にあなたにとって何も、もやもやがなければ、いいのですけど。この『父のお許し』という言葉。新約聖書のここに、米印 二つ、ついているよね。その欄外を見たら直訳が書いてある。なんて書いてありますか？

『父と無関係には』というこれ、突っ込み入れたくないですか？皆さん。『父のお許しなしには』というのと、『父と無関係には』というのとは、ちょっと違う？ 53:46.86

このギリシャ語の原文は、『アメウ』と言うんですけど、これは本当に、『許可をする』とか『許す』とかという、そういう意味合いじゃなくて、『父が知らないところでは』という意味合いなんです。

父は全てを見ておられる。知っておられる。スズメ一羽が落ちるのも、父は知っておられる。だけど、それを落としているのが父なんだということを言いたいのではない。

『見えています。』『知っています』ということは大きいんですよ。でも、それを許可している。神様が支配している。神様がコントロールしている。そこまでいかない。

今、私たちに与えられている神の像と、神の似姿を、私たちはフルに使うことに長けていけば、我々の関係性という神の国は、非常に強いものになっていくことができます。

神様はそれを、聖霊とともに私たちの内から掻き立てていてくださるわけ。でしょ。

もうセミナーの初めの頃に、いつも言ってきた。もう、私の 18 番例え、もうご存知ですよ。皆さん。

1 枚の紙があります。真っ白で綺麗ですけども、これが綺麗だと思ったら、もうめっちゃくちゃ汚れています。もうメチャクチャです。汚れて破れて、どうしようもありません。この紙は誰ですか？これが私です。

でも、この私が無代価で、神の身体の中に入れられて、閉じられました。私はもう今、見えません。私はこの本の中です。と、いうわけよ。

これが、『キリストにある』ということ。これが、キリストとの『相互内在』にあるということなんです。サタンから見れば、今もう完全に私たちを見たらキリストの体に見えるんです。

その中で、その関係性をしっかりと自分の中に打ち立てておくこと。神との関係、御子イエスとの関係、聖霊との関係というのも言ってきました。これまでも、サタンとの関係を言ってきたんですけど、これで、重要な関係性を自分のものとしましょう。はい今日はサタンと悪霊との関係性ということでした。58:32.93

5C16 回目キングダム 20260411

あの一、最後に、もう少しだけ。いいですか？

さっき、パウロが、「サタンから、トゲが与えられる」と言ったところなんですけど、サタンからそう言われるほど、「私がどれほどの大きな啓示を与えられたか。それを伝えるための使命が自分にはあるから。それを伝えられたら、サタンは困るから」「とにかく、このパウロにはトゲを突き刺しておけ」と。で、迫害を受けるわけよ。

つまりね、私たちも御国の啓示と真理に長けていくと、パウロの言うように、サタンは普通の他の人はいいいけど、「こいつだけは生かしておいたらいかん」と言って、サタンは、腕まくりして攻めに来る。

だから、神に従いながら、神の中にあって、「サタンに立ち向かいなさい」と言っているわけ。そういう現実は今もあるわけよ。

だからね、「ああ、我々は勝った。勝った。『勝利、勝利』」と言って、歌ってりゃあ、いいってもんじゃない。「どんなことになろうと、何がいつ来ようとも、我々はそれを見抜いて、その策略をへし折って、足の下に踏みにじっていくぞ!」ということが必要なんです。1:00:16.90

ちょろちょろ私たちに、その意味でも邪魔してくる悪霊がいる。霊のチンピラ悪霊がいる。で、それに対して、一つ一つ大切に見極めて対応をするんです。だけど、「ほら悪霊が、これでいなくなった。」「勝った、勝った。」と言って喜んでいたらいいってもんじゃないんですよ。

アップグレードが、必要。あなた方に従うからといって喜ぶなど。むしろ、あなた方の名が天に記されていることを喜びなさいと。(ルカ 10:20)

つまり、あなた方に神の像と神の似姿が任せられ、天の御国の中に置かれているんだよということ。その確固たる土台となる現実を喜びなさいということです。

もう、諸々の悪霊を追い出した。縛ったという、そんなことで一喜一憂するなということ。だって、そんな、我々の生きかたの中では、もう当たり前じゃん。ということです。

私の仕事、もう何人もの人が知っていると思いますが、アパート・マンションの空き部屋を、人が退出していった後、次に借りる人が入るまでの間、リフォームしてクリーニングする仕事なんです。だから、オーナーさんから、何号室空きましたからって連絡が入ると、「わかりました。見に行きます」と言って、見に行くわけです。

皆さんどう思います？長年住んでいた人の家というのは、いろんな。カラーがあります。私、入ったらね、もちろん家具も何もないですよ。ないけど、そこで初め、「あ〜あ」とうんざり思うわけ。変な霊ばかり。前、住んでいた人が持っていた霊。それはその人と共に引っ越したんじゃないんかい・・・みたいなことを思うけど、案外まだ引っ越したすぐ後のそこには、漂っているんです。

「えー、またかよ」って思うけど、私、それも毎度毎度のことで、いつも、いつも、追い出したりしませんよ。出て行けなんて。いちいちそんなこと言わない。もう平気で、その中に入って作業を始めます。いろんな職人さんが来て、そこに招いて、ああだ、こうだと言ってね。で、私はそこで、もう 3 日、4 日、5 日、6 日、長い時は、1 週間以上、そこに入って作業するんですけど、でも 1 日 2 日 3 日、そして、4 日 5 日 6 日と経って

5C16 回目キングダム 20260411

いくほど、もういなくなります。そして、霊調が変わってきます。

だから、もうそれがね、これ言っているのか悪いのか、快感。スカッとします。で、全部終わって、戸を閉めて、オーナーさんに連絡して、玄関のドアをちょんちょんと、手で押さえてね。もう悪いのが入らないように、ちょんちょんと祝福して帰るんです。

この本に書いてあるジョン・ロバートスティーブンスさんはね、ホテルに入ったら、大概、枕はそのままあるじゃないですか。で、その枕に寝ると、前に泊まっていた人の霊性がわかると言って、この人はこんなだったなって、こんな枕あっちにやって、新しい枕にしてくれと。まあ、そこまで言ってなかったと思いますけど、分かるんですって。

まあ、私、本当にその気持ちわかる。今日ホテルに泊まる人がここにいるけどね。・・・それを恐れる必要はないんですよ。まあ、それぐらい、**何も恐れる必要がない。でも一つ一つの確に対処する。それは技術です。**

我々が互いが集まって、聖書から、神のやり方から学んでいく。それは必要です。そして、**自分の中で、生活の中で、実践していくんです。そしたら、もうしょうもないつまない霊や攻撃に悩むこともつまづくこともない。**

私たちが戦うのは、ここぞという場面、戦うべき時があるから。そこに向かって、日々鍛錬しましょうということでもあります。はい、ちょっと時間超過しました。すみません。1つ歌って終わります。

賛美:10 番、『天を造り出し』

それでは 4 月のキングダムセミナーをこれで終わります。はい、ありがとうございました。